

「性の多様性を認める態度」を促進する要因

—— セクシュアルマジョリティへのインタビュー調査 ——

葛西 真記子*, 小渡 唯奈**

(キーワード: セクシュアルマイノリティ, セクシュアルマジョリティ, 性の多様性)

【研究の背景】

1. はじめに

2012年3月、国際連合人権理事会において、潘基文国連事務総長がレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー（以下LGBT）の人権保護を訴えるスピーチを行った。性的指向や性自認を理由に暴力や差別を受けることがあってはならないと世界的に明言したスピーチである。また、同年6月にはアメリカ連邦最高裁が同性婚を認めない連邦法は違憲であるという歴史的判決を下した。現在同性婚や同性カップルの権利を保障する制度をもつ国・地域は世界中の約20%の国・地域に及ぶ（EMA日本）。しかし、日本においては未だセクシュアルマイノリティであるがゆえに不利益を被ることも多い。ゲイ・バイセクシュアル男性について、教育場において「ホモ・おかま」といった言葉による暴力被害の経験者が54.5%にのぼるという報告（日高・木村・市川, 2005）や、異性愛者を装うことに葛藤し、ストレスを感じている男性同性愛者ほど、抑うつや特性不安、孤独感、自己抑制型行動特性が高く、自己効力感が低かったという報告がある（日高, 2000）。2015年には日本においても同性カップルに、婚姻関係と同等の扱いを認める証明書の発行を盛り込んだ東京都渋谷区の条例案が区議会本会議で賛成多数で成立し、同年4月1日施行されたが、1千通を超える反対意見が区に押し寄せたり、抗議デモが行われたりした（産経新聞, 2015）。

また、2004年から性同一性障害特例法が施行され、医師の診断のもと、一定の条件を満たせば性別の変更が認められるようになった。そうした法整備は、心理的性別に一致した身体を獲得したい者を対象にしたもので、典型的な男／女のあり方になじまない者や、医学的治療を望まない者が排除される可能性を含むこととなった（針間, 2014）。針間（2014）によると、性同一性障害や性分化疾患の治療は「男／女」どちらかの性に近づけるように行われてきたが、ジェンダー概念の進展に伴い、性のあり方は「男／女」に二分されるものではないという考え方が認識されるようになってきた。一人ひとりのさまざまなジェンダーのあり方を尊重する関わりが求められ、2013年に発行されたDSM-5（Diagnostic and Statistical Manual of Disorders, fifth edition）では、従来の性同一性障害（Gender Identity Disorder）は、身体的性別や心理的性別が典型的な男性・女性以外の者も包括する性別違和（Gender Dysphoria 高橋ら訳）へと変更された。

以上のようなセクシュアルマイノリティの人権を守ろうとする気運の高まりには、セクシュアルマイノリティ当事者だけでなく、非当事者の人々による働きかけが不可欠である。

2. セクシュアルマイノリティに対する非当事者の態度

Herek（1984）は、同性愛者に対する態度について研究した論文のレビューに基づき、社会心理学的機能によって3つの態度を区別した。それらは、①過去の同性愛者との関わりから、同性愛に対する一般的な態度が形作られるという経験的態度（Experiential Attitude）、②セクシュアリティやジェンダー・アイデンティティについての個人内の葛藤や不安を同性愛者に投影し、彼らを排除することで、自身の葛藤や不安に耐えようとする防衛的態度（Defensive Attitude）、③例えば都市で生まれ育った者は、郊外で生まれ育った者より同性愛に寛容であるというように、同性愛に対する態度は個人の信念やソーシャルネットワークまたは準拠集団に強く結び付いたものとする象徴的態度（Symbolic Attitude）である。Herek（1984）は、防衛的態度は特に敵意や偏見を伴うネ

*鳴門教育大学臨床心理士養成コース

**うるま市立教育研究所

ガティブな態度であることが多く、そうした態度の変容には同性愛者との個人的な接触によって、ステレオタイプや偏見が正確でないことに気付き、正しい情報を得る機会が必要であると指摘した。

日本における非当事者を対象としたセクシュアルマイノリティに対する態度の研究は、例えば、和田（1996）による研究がある。和田（1996）は大学生の異性愛者を対象に同性愛に対する態度について質問紙調査を行った。研究の結果、女性は男性よりも同性愛に対し、より社会的に容認していて、ポジティブなイメージを持っていたことが明らかになった。さらに、女性と比べ男性は同性愛を好ましく思っておらず、特に男性同性愛者とより心理的距離をとることが明らかになった。また、桐原・坂西（2003）は、伝統的な価値観を持つ男性ほど、ゲイ男性を、従来の男性性とは対照的な「なよなよしている」、「優柔不断」といった否定的特性を持つと評価したことを報告した。また、レズビアン女性を決断力のある人物であると評価し、異性愛者とは異なる特性を持つ者と区別して見られていたことを明らかにした。さらに、山本・大蔵・重本（2012）は異性愛者の大学生・専門学生を対象に質問紙調査を行い、同性愛者であると打ち明ける開示者との関係性によって、同性愛開示への反応が異なることを示唆している。具体的には、仕事仲間くらいならかまわないが、家族など自分にとって身近な人物が同性愛者であった場合に嫌悪的な態度をとったことを明らかにした。

性自認に関する態度については、日向・高田谷・近藤（2007）によると、教育領域の学生の8.5%（N=169）、看護領域の学生の11.2%（N=130）、その他領域の学生の11.2%（N=215）が「同性愛者は性同一性障害（以下GID）である」という質問に、そうであると答えたことが報告されている。また、「GIDになるのは、幼い頃の家庭環境に問題があったからである」という質問に対して、他領域の学生の16.3%がそうであると答えた。このことから、性自認と性的指向の混同や、正しい知識の不足がうかがわれる。久保（2010）は、社会人・大学生242名を対象に性及び性同一性障害の意識調査を行い、「男女の2つに分けられない性があること」に対し、約50%の調査協力者が肯定的であり、社会人より大学生の方が、より肯定的であることを明らかにした。また、GIDを「大変そうだ」と考える調査協力者は70%以上であり、約10%が「親や遺伝要因」と考えていた。

ゲイ・バイセクシュアル男性や自分の性的指向が分からない男性は、そうでない男性に比べ、5.98倍自殺未遂のリスクが高い（Hidaka, Operario, Takenaka, Omori, Ichikawa and Shirasaka, 2008）など、セクシュアルマイノリティに対し、心理的なサポートが必要だと考えられる。しかし、臨床心理士を育成する大学院において、セクシュアルマイノリティについて学ぶ機会がない。男性臨床心理士を対象とした品川・兒玉（2005）の研究では、異性愛のクライアントよりも同性愛のクライアントに対し、同席を回避するといったネガティブな反応をしたことが明らかになった。そうした社会的要請を受け、葛西・岡橋（2011）は、同性愛・両性愛肯定的カウンセリング自己効力感尺度日本語版（LGB-CSIJ）を開発し、LGBに対する肯定的カウンセラー養成・訓練の必要性を示し、訓練の効果を客観的に示す指標を提示した。

3. セクシュアルマイノリティに対し肯定的な人々

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル（以下LGB）を肯定的に捉え、理解を示す態度についても研究が行われてきた。Ally（アライ：同盟者、協力者の意）とは、セクシュアルマイノリティに好意的で、彼らの活動を支える異性愛者のことで、主に米国で用いられてきた用語である。Washington & Evans（1991）は、Allyを「不公平な扱いを受ける人々を私生活や職場においてサポートすることを通し、抑圧を止めるために活動する賛同者で、『優越な（dominant）』または、『多数派の（majority）』集団に属する者」と定義し、Allyとなり活動するようになるまでの4つの段階を提案した。具体的には、1）LGBの人々との相違点や共通点に気付く「気付き」の段階、2）法律や政策、慣習を知り、それらがLGBの人々に与える影響を学んだり、LGBの文化などを理解する「知識・教育」の段階、3）学んだ知識を伝えるスキルを身につける「スキル」の段階、4）社会の変化を目指して行う「活動」の段階である。さらに、Gelberg & Chojnacki（1995）は、自身らの経験をLGBアイデンティティ発達モデルと比較しながら、LGBを支援するキャリア・カウンセラーとなっていった6段階を提案した。1）LGB友人の存在によって個人的・職業的・政治的にLGBについて積極的になる必要性へ気付く「気付き（Awareness）」の段階、2）ホモフォビア（同性愛嫌悪）や異性愛主義が意図せず自らの言動に現れていることを知り、Allyとして活動することとの不一致に不安や落ち込みを経験する「アンビバレンス（Ambivalence）」の段階、3）Allyとしての自己評価と自己効力を感じ、LGBについて知識を得る「エンパワーメント（Empowerment）」の段階、4）エンパワーメントや自己効力、誇りを強く感じるにつれて職業的・個人的・社会的・政治的な活動が活性化する「積極的行動（Activism）」の段階、5）Allyとしての行動と目標の一致によって自己評価が上がり、ホモフォビアや異性愛主義と対決する「誇り（Pride）」の段階、6）Allyとしての活動

を生活の一部として統合していく「統合 (Integration)」の段階である。Getz & Kirkley (2003) は、大学の教職員、学生である LGB を支援するプロジェクト参加者20名を対象にインタビューを行い、Ally としてのアイデンティティが発達していく5段階について明らかにした。参加者らは、初めて LGB の人々に関わる上で、恐怖や警戒によって LGB との協力やコミュニケーションの難しさを感じる1)「加入 (Entry)」の段階を経て、互いの集団へのネガティブなステレオタイプが払拭されず、率直な対話が困難な2)「未知への恐怖 (Fear of the unknown)」の段階を経験する。その後、3)「特権の自認 (Acknowledgement of privilege)」の段階において異性愛者のもつ特権への気づきを得て、自ら Ally と名乗ることへなじみ始める4)「参加 (Engagement)」の段階の後、5)「Ally/支持者としての自己の認識 (Conscious self-identification as allies / advocates)」の段階において、活動に関して誇りを持つようになっていくという過程が明らかにされた。

こうした Ally として活動する要因について Stotzer (2009) はゲイ男性に寛容な態度をもち、同性との性的接触と同性への性的欲求のない68名を対象とした半構造化面接によって LGB に肯定的な態度が形成される要因を明らかにした。その結果、LGB に肯定的な態度が形成される要因として、個人的経験や小学校教育によって LGB は異常ではないという態度が早期に形成されていることや、高校や大学で LGB の友人と出会うこと、LGB 友人が家族や友人から受け入れてもらえず苦悩する姿や受け入れてもらおうと努力する姿に触れることで共感したり、LGB に否定的な言動に抵抗を感じる経験をしていたことが明らかになった。さらに、早期に LGB に肯定的な態度が形成されていた者では、後に LGB カミングアウトを受けても、早期に形成されなかった者に比べ困惑が少ないことが示唆された。また、Ryan, Broad, Walsh, & Nutter (2013) は大学で働く教員や職員を対象に、Ally 活動への参加について得られた語りから、どのようにして職場における Ally となるか検討した。Ryan ら (2013) は Ally 活動へと参加していった教職員らは社会的責任のもと、学生の人権を守るという職業的な要請に応えるために、職場での Ally 活動へと参加していったことを明らかにした。そのほかにも Ally として活動する動機を調査した欧米の研究 (Asta & Vacha-Hasse, 2013; Borgman, 2009; Duhigg, Rostosky, Gray & Wimsatt, 2010; Russell, 2011) の結果から、その動機を分類すると、① LGBT 当事者との個人的な関係、意味のある関係、家族や地域での職業的な関係や個人的な関係という「関係性からの動機」、② 正義、宗教、人権など「価値観に基づいた動機」、③ 多数派としての抑圧や特権の自覚という「罪の意識に基づいた動機」となった。

日本においては、セクシュアルマイノリティに対しどのような態度をもっているのかについては研究されている。例えば、岡橋 (2006) は、大学院生を対象に、LGB に対する意識調査を行った。その結果、一般的な LGB に対しては肯定的であったが、身近な存在に LGB がいる場合を想定した質問においては、80.2%の調査協力者が「まあまあ嫌悪感がある」ことが明らかになった。しかし、Ally のようなセクシュアルマイノリティを支援する非当事者に関する研究はほとんど見当たらない。そこで、日本における非当事者がどのようにセクシュアルマイノリティを支援するに至ったかについての、研究が必要だと考えた。それが明らかになれば、より多くの非当事者がセクシュアルマイノリティ当事者に対して肯定的な態度を持ち、積極的に支援するようになる一助となると考える。

【研究の目的】

不可視なセクシュアルマイノリティの存在を認識し、彼らについての気づきを得た非当事者が周囲にいることで、セクシュアルマイノリティの人々の生きづらさはある程度緩和されるだろう。また、異性愛中心かつ性別が男/女に二分される社会を問い直し、性の多様性に気付くことで、様々なライフスタイルを認められるようになることは、非当事者にとっても意味あるものであると考える。

そこで本研究では、性の多様性を認める態度を男/女という性別のあり方や異性愛的な考えの偏りに気づき多様性を認められる態度と見え、そうした態度をセクシュアルマジョリティである者が身に付けていく過程を明らかにすることとした。

【対象と方法】

1. 対象

本研究の対象者は、性の多様性を認める態度を形成していると考えられた異性愛者かつシスジェンダーの者と

した。具体的には、セクシュアルマイノリティに対する支援活動を行う者7名、セクシュアルマイノリティについて研究を行っている者1名であった。調査協力者の8名には、研究の趣旨と内容、プライバシーの確保、研究への参加は自由意志であることなどについて書面を用いて説明し、同意を得られた。以下に対象者の年齢と性別、活動期間を示す（表1）。

表1 インタビュー対象者の年齢、性別、活動期間

対象者	年齢	性別	活動期間
A	60代	女性	1年6か月
B	20代	女性	6か月
C	20代	女性	1年
D	20代	女性	8か月
E	20代	女性	8か月
F	20代	女性	1年8か月
G	40代	女性	5年
H	40代	女性	8年

2. 調査時期

2014年8月から2016年7月に実施した。

3. インタビュー方法

対象者に対して個別に半構造化面接を行った。面接時間は90分～210分であった。主な質問項目は、「支援を始める前／後のセクシュアルマイノリティのイメージはどうか?」、「活動を行うようになったきっかけは何ですか?」などでそれについて調査協力者に自由に話してもらい、その流れの中で質問をし、詳しく語ってもらった。

4. 分析手順

本研究は、プロセスを明らかにするものであり、研究結果を性の多様性を認める態度を形成するプログラムの実施へ活用することを目指すものであることから、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2007)を用いた。

調査協力者の許可を得て、面接内容は全てICレコーダーで録音し、その後逐語化し、データとした。データ全体に目を通し、数行ずつ関連のある部分から概念生成を行った。さらに、概念の意味のまとまりごとにカテゴリー化した。その後カテゴリー間の関係について明らかにし、2事例以降は1事例目と比較検討しながら分析を進めた。

【結果と考察】

全体の分析の結果、16の概念を生成した。そのうち、性の多様性を認める態度が形成されるプロセスについて、4つのカテゴリーとそれらを形成する10の概念が見出された。カテゴリーの関係を図1に示す。以下にその概要を述べ、カテゴリーごとに説明する。

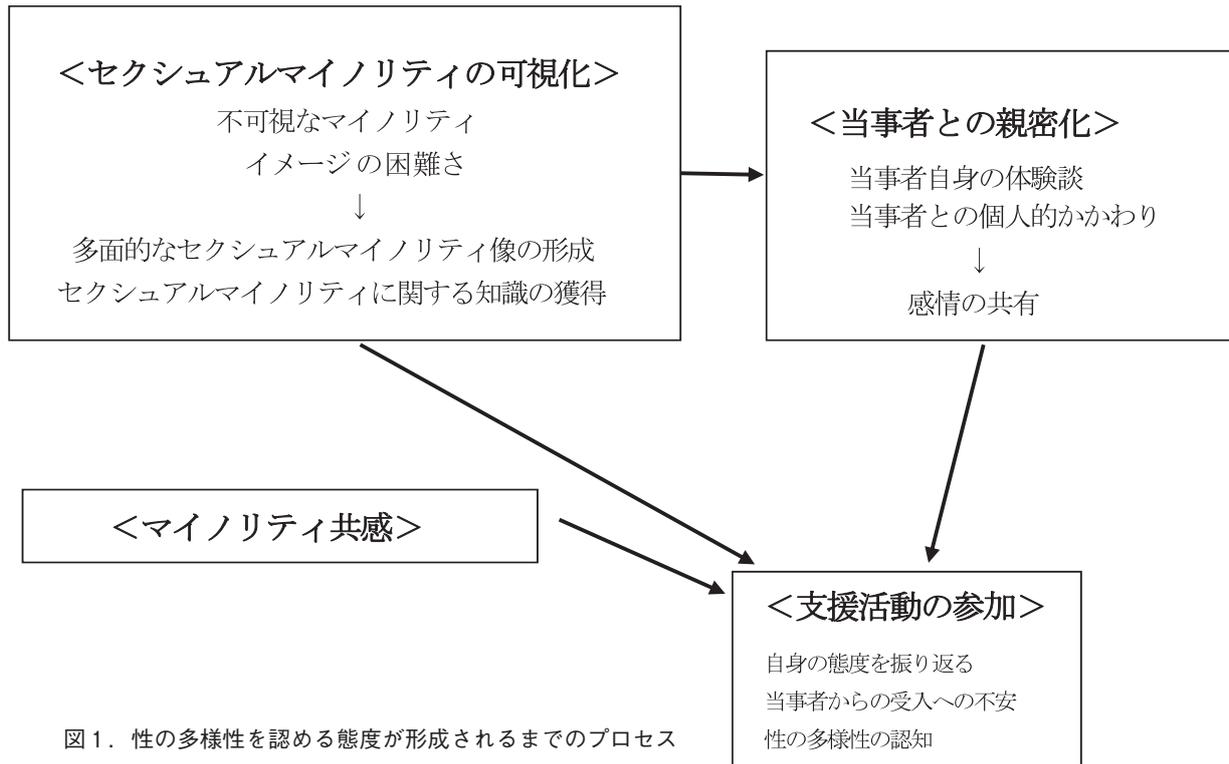


図1. 性の多様性を認める態度が形成されるまでのプロセス

まず、性の多様性を認める態度が形成されるきっかけとしてメディアなどでの漠然としたイメージではなく、一人の人間として認識する<セクシュアルマイノリティの可視化>をカテゴリー化した。<セクシュアルマイノリティの可視化>では、知識の深化やイメージの変化が見られた。セクシュアルマイノリティが可視化され、<当事者との親密化>という感情面のプロセスが進むにつれ、自身もマイノリティであるという経験から「マイノリティとしての共感」を感じる。以上のプロセスを経て支援活動へと参加していくことが示された。以下に各カテゴリーについて述べる。概念は下線、例示部分は「」で示す。

<セクシュアルマイノリティの可視化> Visualization and Knowledge of LGBT+

セクシュアルマイノリティであるという人との出会いや、知人からのセクシュアルマイノリティであるというカミングアウト、体験談が書かれた書籍や映画を読んだり観たりすることをきっかけに、それぞれの当事者たちがどのような人柄で、どのようなことで悩んでいるのか、一人の人間として当事者と出会う経験である。セクシュアルマイノリティと出会う以前は、「考えたことなかった」、「メディアでしか触れたことのない遠い存在」で、「排除された辛い環境にあるセクシュアルマイノリティ」をイメージしていた。不可視なセクシュアルマイノリティという状態であった。また、知人からカミングアウトされても、知識がないため「身内だから普通という感覚で、その他のセクシュアルマイノリティとイメージが断絶している感じ」など、イメージの困難さについて語られた。そうしたイメージは、実際に当事者と出会うことで変化していった。例えば、「メディアで言われるような、いじられるほどの人じゃないのかなっていう感覚」、「映画観てたらそうじゃない人とかもいるから、普通に生活があって、で実際と重ね合わせてみたら確かに悩んでるときもあったかもしれないけど、言われてみればそこまで悲劇的ではない」といったネガティブでないセクシュアルマイノリティのイメージが形成されていった。一方で、セクシュアルマイノリティであるがゆえに悩む姿も目の当たりにしていた。例えば「パートナーさんが病気になっても、事故に遭ったとしても家族じゃないから知らせてとかってそういうの読んですっごい不公平じゃないと思って」といった同性愛者であることで被る不利益を知ったり、自身がセクシュアルマイノリティの方に恋愛対象として見られた時に、どう対応したらいいのか分からず悩んだ経験によって、性的指向とは何か理解するという経験をしていた。これらを多面的なセクシュアルマイノリティ像の形成とした。さらに、セクシュアルマイノリティについて、インターネットや書籍で積極的に情報を取り入れようとしたことについても語られた（セクシュアルマイノリティに関する情報の獲得）。

＜当事者との親密化＞ Personal and Intimate Relationship with LGBT+

友人や仕事の同僚からセクシュアルマイノリティであるとのカミングアウト、当事者とのインターネット上でのやりとりをきっかけに、相手のことをより知るようになり、共感的に当事者の立場を理解するようになっていった。当事者本人からセクシュアルマイノリティについて話を聞いており、そうした経験を当事者本人からの体験談とした。例えば、「X (MtF) さんとかの話とか聞くと、そういう声を、心ない声を聴いてきたみたいな話をしてて、あ、言ってたって思って。(中略) そっち側の目線を考えたことなかったなっていうのを気付いたのかなって思う」に示されるように、当事者の視点を得ることで異性愛主義や男／女のステレオタイプに気づきを得ていた。また、仕事上でセクシュアルマイノリティの当事者とかかわる経験があり、「始めはどうしていいかわからなかったが、家族にも理解してもらえない辛さなどを聞いたりして」、話しをよく聞くような当事者との個人的関わりが増えていった。さらに、当事者の思いを知っていることで、当事者らが遭遇する偏見に怒りや悲しみの感情をもつようになっていたり、または、家族にカミングアウトできたことを一緒に喜ぶという経験をしていた。例えば、「(当事者である友人が家族にカミングアウトできたことについて) メールでももらって、もう、なんか泣いてしまって」、当事者である友人に向けられた「なよなよすんな、男のくせに」という発言に対して怒りを示したりするなど、感情の共有がされていた。

＜マイノリティとしての共感＞ Inter-minority Empathy

マイノリティとしての共感では、「自分もマイノリティな部分あるなって思った時に、自分が当事者じゃないから気持ちは多分ちゃんと分かってないと思うんだけど、けどその自分がマイノリティな部分、だったら、共感できるし、なんか分かるかなって思ったら、なんかちょっと力になれるかもしれない」など自身の宗教的なマイノリティや人種マイノリティとしての経験について語られた。「マジョリティでありながらマイノリティみたいなさ、多分みんなそれは一緒だからさ」のように、セクシュアルな部分についてはマジョリティだが、他の部分についてマイノリティである自身の立場を、自身の活動に生かそうとする語りが得られた。

＜支援活動に参加＞ Joining LGBT+ activity

セクシュアルマイノリティについての知識が増えるにしたがって、これまで自分がしてきた言動が当事者たちを傷つけていたのではないかと不安になるようになった。無意識に言っていること、している行動が、異性愛主義的であったのではないかと、同性愛嫌悪的であったのではないかと、トランス嫌悪的であったのではないかと自身の態度を振り返って考え始めた。その不安を解消するために、また、社会的に正しいことをしたいという思いから支援活動に参加するようになった者もいた。もっと当事者の話を聞きたい、様々なセクシュアルマイノリティについても知りたいという思いから支援活動に参加した者もいた。当事者に誘われて支援活動に参加した者と、自ら当事者を支援活動の場に連れてこようとして活動に参加した者もいた。しかし、中には、「自分は当事者じゃないから受け入れてもらえないんじゃないかと不安だった」と当事者からの受入に対する不安を語った者もいた。

また、活動が長くなり、様々な当事者との関わりが増えてくると、「なんかわかるなというか。自分だって、100%女性で、100%男だけが好きかっていうと、なんか違う気がする。何%かは、同性も素敵だと思ったり、小さいときは、男になりたいと思っていたこともあったし」と、自身の中にも「性の多様性」があり、すべてが性別二元論ではないということに気付いたと語った。

性の多様性を認める態度を形成するまでに、セクシュアルマイノリティについて、知識がなかったり、イメージが難しい中でセクシュアルマイノリティであるという人との出会いや、知人からのセクシュアルマイノリティであるというカミングアウト、体験談が書かれた書籍や映画を読んだり観たりすることをきっかけに、それぞれの当事者たちがどのような人柄で、どのようなことで悩んでいるのか、一人の人間として、多面的にセクシュアルマイノリティを理解するようになっていった。この＜セクシュアルマイノリティの可視化＞の過程とセクシュアルマイノリティ当事者から体験談を聞いて、友人として感情を共有する＜当事者との親密化＞の過程は、同時進行的に進んでいくと考えられる。＜当事者との親密化＞過程において、セクシュアルマイノリティからカミングアウトを受けたり、体験談を聞いたりすることは、内面的であり、特に友人間においては個人志向性の高い自己開示であると考えられる。中村(1984)は、内面的な内容を、個人志向性によって自己開示するとき、開示者の対人魅力が高く評価されたことを明らかにしている。つまり、当事者がセクシュアルマイノリティについて話

すことによって、当事者を好意的に捉え、当事者の体験談によって気持ちを共有しやすかったのではないかと考えられる。

セクシュアルマイノリティについて知り、当事者と親密になるにつれ、〈マイノリティ共感〉で語られた自身のマイノリティとしての経験によって、自身の似たような経験を顧みて、相手の立場や気持ちをより理解しようとするのであろう。ある人は子どもの頃に触れた部落差別や多国籍の人に対する差別への反感を感じながら育った。そうした、社会的公平を求める態度や〈マイノリティ共感〉は、性の多様性を認める態度を形成する上で、重要だろう。他のマイノリティとしての経験が、Ally として活動する要因であることは、Stotzer (2009) の行った調査によっても示されている。日本においても、他のマイノリティであるという経験は、Ally 活動へ参加する要因となっていると考えられる。

そしてこれらの原動力によりセクシュアルマイノリティの支援活動に自らの意志で参加しようという動機につながっていた。支援活動に参加しながらも自身がこれまでに知らず知らずに当事者を傷つけていたのではないかと気がつき生まれ、不安や落ち込みを経験するという Gelberg & Chojnacki (1995) の「アンビバレンス」の段階と類似した状態を経験する。また、支援活動に参加したいが、当事者から受け入れてもらえるだろうかという不安も感じる。中には参加しようとした当事者の団体に断られたり、疎外感を感じ居づらくなり辞めてしまうという非当事者もいるだろう。Ally として継続して活動している者たちは、自身の中にも性の多様性があるということに気付く。

【全体的考察】

セクシュアルマイノリティを支援する活動に参加し、すでに「性の多様性を認める態度」が形成されていると考えられた8名の女性へのインタビューから、性の多様性を認める態度が形成されるきっかけとしてメディアから得られる漠然としたイメージではなく、一人の人間として認識する〈セクシュアルマイノリティの可視化〉の過程があり、その過程では知識の深化やイメージの変化が見られた。セクシュアルマイノリティが可視化され、当事者から体験談を聞き、友人として感情を共有する〈当事者との親密化〉という感情面のプロセスが進むにつれ、自身もマイノリティであるという経験から〈マイノリティ共感〉を感じる。そしてこれらが動機となりセクシュアルマイノリティの〈支援活動に参加〉するようになる。

以上のプロセスを経て支援活動へと参加していくことが示された。以上の結果は、米国で行われてきた Ally に関する研究と類似している。欧米の研究においても、先にまとめたように、LGBT 当事者との個人的な関係や、意味のある関係、職業的な関係から Ally としての活動に参加するという「関係性からの動機」や正義や人権などの「価値観に基づいた動機」が Ally 活動の動機として見いだされており、これらは本研究の結果からも見出すことができた。しかし、欧米で指摘されているような「罪の意識に基づいた動機」というのは本研究ではほとんど語られなかった。自身が多数派に所属しているということにより抑圧や差別をする側であったという点についてはあまり意識が向いていないということであろう。

欧米の研究結果と異なった点としては、特に、〈マイノリティ共感 (Inter Minority Empathy)〉が本研究の結果として示されたことがある。〈マイノリティ共感〉とは「あるマイノリティの当事者が他のマイノリティの当事者の気持ちがわかること」と定義することができる。あるマイノリティとして自分（うち）に向いていた関心が、他者（そと）に向かうようになり、自身の当事者性だけでなく、他者の当事者性に敏感になり、その人たちの痛みや苦しみを感じるようになる。また、ある側面で当事者だった者は他者からの攻撃性や否定的な態度にも敏感であり、マジョリティの者よりも他の当事者の気持ちがわかるということにもつながると考えられる。しかし、すべてのマイノリティが共感することはなく、共感できる者とできない者が存在すると考えられ、その違いや共感を持つようになる過程等についても今後さらに明らかにしていく必要があるだろう。

本研究の結果から、〈セクシュアルマイノリティの可視化〉や〈当事者との親密化〉、〈マイノリティ共感〉といった動機が、Ally 活動への参加の動機となり、これらが、「性の多様性を認める態度」を形成するのに、重要な体験だといえる。

【今後の課題】

今回の研究において、調査協力者が女性のみであり今回得られた結果が、男性に対しても同様に適用できるか

について、検討することが今後の課題である。また、セクシュアルマイノリティについてメディア等で見ている、知っている、あるいは、当事者と接点がある、また、自身も他のマイノリティであるという者の中にもセクシュアルマイノリティに対して肯定的ではなく、Allyになろうと思わない者、否定的な態度を持っている者も存在するだろう。今後は、同じような状況下において否定的、肯定的になる者の違いについて検討していく必要がある。

【おわりに】

セクシュアルマイノリティにとって生きやすい社会とは、性の多様性や、様々なライフスタイルが受け入れられるような誰にとっても生きやすい社会ではないかと考えた。つまり、セクシュアルマイノリティ当事者だけでなく、すべての人々が自分自身の多様性・個性を受け入れ、互いの多様性や個性を尊重し合うような誰にとっても生きやすい社会である。そのような社会になるよう、何ができるかをさらに研究していきたいと考える。

【引用文献】

- American Psychiatric Association (2013). *The diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th). Washington DC, and London, England. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 土肥伊都子 (1995). ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ：母性・父性との因果分析を加えて 社会心理学研究, 11 (2), 84-93.
- EMA 日本 世界の同性婚 (<http://emajapan.org/> 2015年3月25日閲覧)
- Gelberg, S. and Chojnacki, J. (1995). Developmental Transitions of Gay / Lesbian / Bisexual-Affirmative, Heterosexual Career Counselors *Career Development Quarterly*, 43, 267-271.
- Getz, Cheryl and Kirkley, Evelyn A. (2003). Identity Development Models: One Size Fits All? Heterosexual Identity Development and the Search for "Allies" in Higher Education. Paper presented at the 84th meeting of American Education Research Association, Chicago, IL.
- 針間克己 (2014). 第7章性同一性障害, トランスジェンダー, 性別違和 針間克己・平田俊明 (編著) セクシュアル・マイノリティへの心理的支援-同性愛, 性同一性障害を理解する- 岩崎学術出版社 83-92.
- 日高康晴 (2000). ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛的役割葛藤と精神的健康に関する研究 思春期学 18, 264-272.
- 日高康晴・木村博和・市川誠一 (2005). 厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業 ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2 厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究」成果報告
- Hidaka, Operario, Takenaka, Omori, Ichikawa and Shirasaka (2008). Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology* DOI 10.1007/s00127-008-0352-y
- 日向桂子・高田谷久美子・近藤洋子 (2007). 看護学生と他領域の学生の性同一性障害に対する態度や知識と性差観に関する研究 山梨大学看護学会誌, 6 (1), 39-44.
- Herek, G. M. (1984). Beyond "homophobia": a social psychological perspective on attitudes toward lesbians and gay men. *Journal of Homosex.* 10, 1-21.
- Herek, G. M. and Capitanio (1996). "Some of My Best Friends": Intergroup Contact, Concealable stigma, and Heterosexuals's Attitudes Toward Gay Men and Lesbian *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22 (4), 412-424.
- 伊藤裕子 (1997). 高校生における性差観の形成環境と性役割選択：性差観スケール (SGC) 作成の試み 教育心理学研究, 45, 396-404.
- Jost, J. T., Liviatan, I., van der Toorn, J., Ledgerwood, A., Mandisodza, A., & Nosek, B. A. (2010). System justification: How do we know it's motivated? In R. Bobocel et al. (Eds.), *The psychology of justice and legitimacy: The Ontario Symposium*, Vol. 11173-203. Hilldale NJ : Erlbaum

- 葛西真記子 (2011). 同性愛・両性愛肯定的カウンセリング自己効力感尺度日本語版 (LGB-CSIJ) 作成の試み, 鳴門教育大学研究紀要, 26, 76-87.
- 葛西真記子・岡橋陽子 (2011). LGB Sensitive カウンセラー養成プログラムの実践 心理臨床学研究, 29 (3), 257-268.
- 木下康仁 (2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法 富山大学看護学会誌 6 (2), 1-10.
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, 9 (2), 173-180.
- 桐原奈津・坂本友秀 (2003). セクシュアル・マイノリティに対するセクシュアル・マジョリティの態度とカミング・アウトへの反応 埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学 I), 52, 55-80.
- 久保祐子 (2010). 多様な性のあり方と性同一性障害に関する意識調査-性のグラデーションという観点から- 鳴門教育大学修士論文
- 向田久美子 (1998). 子どもの偏見に及ぼす親の影響について 性格心理学研究, 6 (2), 82-94.
- 中村雅彦 (1984). 自己開示の対人魅力に及ぼす影響 心理学研究 55 (3), 131-137.
- 岡橋陽子 (2006). セクシャル・マイノリティに対する意識変容を目指す訓練プログラムの効果-心理療法家を目指す者を対象に- 鳴門教育大学修士論文
- 品川由佳・兒玉憲一 (2005). 男性同性愛者に対する男性臨床心理士のクリニカル・バイアスの予備的研究 日本エイズ学会誌, 7, 43-48.
- Ryan, M., Broad, K. L., Walsh, C. F., Nutter, K. L. (2013). Professional allies: the storying of allies to LGBTQ students on a college campus. *Journal of homosexuality*, 60, 83-104.
- 産経新聞 (2015). 「同性パートナー条例」が成立 全国初, 東京都渋谷区」 (<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20150331-00000535-san-soci> 2015年4月1日閲覧)
- 下津咲絵・坂本真士・堀川直史・坂本雄二 (2006). Link ステイグマ尺度日本語版の信頼性・妥当性の検討 精神科治療学, 21, 521-528.
- Stotzer, R. L. (2009). Straight Ally: Supportive Attitudes Toward Lesbians, Gay Men, and Bisexuals in College Sample *Sex roles*, 60, 67-80.
- 和田実 (1996). 青年の同性愛に対する態度-性および性役割同一性による差異- 社会心理学研究, 12, 9-19.
- Washington, J. and Evans, N. J. (1991). Being an ally Evans, N. J. and Wall V. A. (Edi) *Beyond Tolerance: Gays, Lesbians and Bisexuals on Campus*, American Coll. Personnel Association, Alexandria, VA. 195-204.
- Worthington, Roger L.; Dillon, Frank R.; Becker-Schutte, Ann M. (2005). Development, Reliability, and Validity of the Lesbian, Gay, and Bisexual Knowledge and Attitudes Scale for Heterosexuals (LGB-KASH) *Journal of Counseling Psychology*, 52 (1), 104-118.
- 山本章加・大蔵雅夫・重本津多子 (2012). パーソナリティとイメージが同性愛に対する態度に与える影響 徳島文理大学研究紀要 84, 85-91.
- 柳沢正和・村木真紀・後藤純一 (2015). 職場の LGBT 読本「ありのままの自分」で働ける環境を目指して 実務教育出版
- 好井裕明 (編著) (2010). 差別と排除の「いま」 第6巻 セクシャリティの多様性と排除 明石書店

Promoting Attitudes of Acknowledging Sexual and Gender Diversity : Interviews with Sexual Majorities

KASAI Makiko* and ODO Yuina**

(Keywords : Sexual Minority, Sexual Majority, Sexual and Gender Diversity)

This study aimed to investigate the process of promoting attitudes acknowledging sexual and gender diversity. We interviewed 8 people who identified themselves as “allies” for sexual minorities. Allies are individuals who are members of a privileged social group who support and advocate for members of an oppressed group (Washington & Evans, 1991). The interview questions were as follows : 1) How has the image of sexual minorities changed after joining LGBT-related activities? 2) What motivates you to participate in LGBT-related activities? Interview data were analyzed using the M-GTA. The process of promoting attitudes acknowledging sexual and gender diversity showed 9 concepts and the following 4 categories ; “Visualization and knowledge of LGBT+,” “Personal and intimate relationship with LGBT+,” “Inter-minority empathy,” and “Joining LGBT+ activities.” Compared with other studies done in the United States, Japanese allies did not show much desire to act in alignment with their deeply held principles and values such as justice, civil rights and religious / moral beliefs. Their desire was much more related to their personal relationships with LGBT+.

*Naruto University of Education

**Uruma Educational Center